

最

初は左手指先のしびれ感。次は左足親指、そして人差し指と、少しずつローソク

の火が消えていくように感覚がなくなっていく。2003年3月、それは、朝のシャワーを浴びている時、突然やってきた。原田さんは「とうとう俺にもやってきた」と直感したという。

「両親ともに脳卒中で倒れましたから、かなりの確率で自分も、と考えていました。浴室から必死に抜け出して、娘の部屋のドアをたたきながら、「来たぞー」と起こし、氣力をふりしほってパンツをはきました(笑)」

素早い処置で、一命を取りとめた。だが、突き付けられた現実には左半身麻痺。リハビリのための入院生活は7カ月におよんだ。原田さんは入院直前まで芸能プロダクションの社長を務めつつ、趣味で始めた居酒屋の店主としてもバリバリに働く日々を過ごしていた。つまり、原田さんは起業家だったのだ。しかし、復帰は無理と判断せざるを得ず、会社は整理し、店は女将など従業員に任せることに。

「何をすることも先頭をきってやってきましたので、リハビリ中はトイレも風呂も人に手伝ってもらわないとできない自分の体を恨みました。なんで生きてしまったんだと。後ろ向きなことばかり考えている日もありましたね」

復活への第一歩は看護師の叱咤激励がきっかけ

退院が近づいてきたある日のこと、その後の人生を悩む原田さんに、ひとりの看護師が言葉を投げかけた。

「原田さんにはできないことはないよ？ 歯磨きだって、ちゃんとできないでしょ。だったら、使えるほうの手だけでできる道具を考案してよ。でき上がれば、それがあなたの仕事になるでしょ」と。その言葉でバツと目覚めました

確かに歯磨きには困っていた。右手しか使えないので、歯磨き粉を付けることもままならない。口をすすぐ時も、麻痺した口から水がこぼれ出てしまふ。「まず、歯ブラシを固定する方法を考えました。最初に考えたのは、コップの側面上方に穴を2つ開けて、そこに歯ブラシを通す方法です」

1000円ショップで買ったコップで何度も試作を重ねた。知り合いの会社にサンプル製作を頼んだものの、製品化するためには複雑な形になる金型づくりがコストがかかりすぎて、高価なものになってしまつたわかった。「現在の、歯ブラシをコップの上に固定する形にたどりつくまで、10回は試作品をつくりました。その間、神奈川県産業技術総合研究所や中小企業セ

ンター、神奈川県工科大学などに技術支援を請い、入院していた病院の理学療法士や看護師たちはアドバイザーに。リハビリセンターの患者さんにはモニターになってもらいました」

多くの協力者が得られたのは、自ら積極的に行動を起こし、行政や病院を巻き込んだ結果だった。来年には販売を開始する予定の歯磨きコップは、その名も「パラリンコップ」。商標登録、意匠登録を済ませ、特許も出願した。

「次は何をつくるんだよと、尻をたたかれていますが、障害者にも介護者にも喜ばれるトイレ関連の商品が完成しつつあります。具体的なことはまだヒミツ(笑)。歯磨きや排泄はすべて食べることにつながっていますよ。『生きるってことは食べること』。今は、その思いが奮起の源になっています」

行政機関や病院を巻き込んで、生活弱者に必要な道具を追求。自分自身の体をその開発に活用



DATA
 開業/2005年1月
 開業資金/60万円
 売上高/実績なし
 事業内容/脳卒中などで障害を持った人や高齢者でも使いやすい生活用品・機器の企画開発
 アクセス/☎&☎046-285-0509

福祉用具機器研究開発の会
原田太郎さん(64歳)
 神奈川県愛川町

これが「パラリンコップ」。歯ブラシが固定でき、上部の微妙な形が口への接着面を増やし、麻痺した口からの水漏れを防ぐ



復活を期す執念が、
 看護師のセリフを、
 千載一遇の金言にした、
 と言ってもいいかも。
 結局は自分の気持ち！



女性が男性かわからないけど、大事な気付きを与えてくれた看護師さんは、やっぱり白衣の天使。長い人生の中で何回かは、そういう重大な示唆を授けてくれる人との出会いって、あると思う。でも、耳を傾けなければ、それまで。病室での会話をきっかけに、むしろ障害を生かすという、大逆転発想を原田さんが持っていたのは、やはり、復活にかける並々ならぬ思いがあったからでは？ 「あきらめないこと」。シンプルだけど逆転のための鉄則。原田さん、あなたは高齢化ニッポンの道しるべです！